

「局所浸潤前立腺癌の治療戦略」

—司会の言葉—

並 木 幹 夫

金沢大学大学院医学系研究科集学的治療学

限局性前立腺癌に対する治療は手術療法、放射線療法、ホルモン療法とも、その治療成績は非常に良好で、治療法の優劣を治療法の侵襲性や治療後の QOL に求めるようになってきた。しかし、局所浸潤前立腺癌の治療成績は、どの治療法も単独では十分な成績を挙げることが難しいため、その治療選択が重要になり、種々の治療を組み合わせた集学的治療も考慮に入れる必要がある。

本シンポジウムでは、手術療法、放射線療法、ホルモン療法の選択基準や、その組み合わせなどにつき 3 名の先生に御討議いただいた。

金沢大学の溝上先生には「各種放射線療法の特徴と適応」について御発表いただいた。特に、局所浸潤前立腺癌に対する治療戦略を考えるにあたり、浸潤の有無は正確には判断できないため、局所浸潤が多いと予想される high risk group の前立腺癌を対象にした放射線による治療戦略を中心に、各種放射線療法の特徴と適応を述べていただいた。

大阪医科大学の東先生には「手術療法の立場から」について御発表いただいた。とくに、手術療法は“病

巣を摘除する治療手段”のみならず“術後の治療方針を決定する上での重要な情報源”として長所を有することが強調された。

岐阜大学の江原先生には「ホルモン療法の位置付け」について御発表いただいた。特に、局所浸潤前立腺癌におけるホルモン療法は、欧米の報告では無治療よりも全生存率を改善する可能性を示され、さらに低分化型腺癌などの予後不良な症例では、集学的治療の一環としてホルモン療法を検討すべきであることを述べられた。

限局性前立腺癌が、ほぼ根治が可能になった現在、次のターゲットは局所浸潤前立腺癌である。局所浸潤前立腺癌も、手術療法、放射線療法、ホルモン療法の適応を慎重に検討し、それらを組み合わせた集学的治療により、今までより良好な治療成績を上げることが可能なため、本シンポジウムでの御発表が、前立腺癌治療成績の向上につながることを期待したい。

(Received on March 13, 2006)
(Accepted on March 20, 2006)